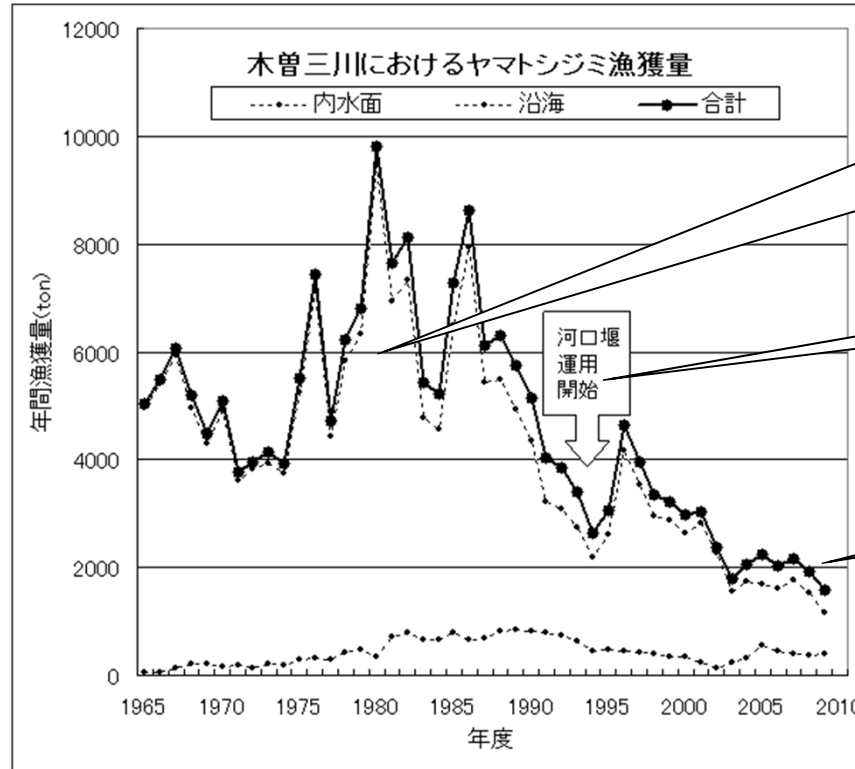


長良川河口堰の開門調査により期待される効果と愛知ターゲット

汽水域の自然環境と水産資源・野生生物(特にヤマトシジミ)の回復を検証



河口堰建設以前の漁獲量は年6千トンの水準で変動

河口堰の建設と運用開始以後は減少

近年の漁獲量は2千トン前後

三分の一に低下

- 河口堰上流部では河口から20キロ近くまでの長良川の漁場が淡水化で消滅・堰の運用後に淡水域への種苗放流が続けて3年間試みられたが失敗。
- 堰の下流部で揖斐川と合流している場所に漁場が残っているが、ヤマトシジミの再生産サイクル:稚貝の定着後の成長に伴う移動・分散が阻害されている。
- 地盤沈下と河床の浚渫・平坦化でヤマトシジミの生育・堆積環境が大きく失われた。

愛知ターゲット: 2010年10月に開催された第10回生物多様性条約締約国会議(COP10)で合意された目標

戦略目標B: 生物多様性への直接的な圧力を減少させ、持続可能な利用を促進する。

目標6: 2020年までに、すべての魚類、無脊椎動物の資源と水生植物が持続的かつ法律に沿ってかつ生態系を基盤とするアプローチを適用して管理、収穫され、それによって過剰漁獲を避け、回復計画や対策が枯渇した種に対して実施され、絶滅危惧種や脆弱な生態系に対する漁業の深刻な影響をなくし、資源、種、生態系への漁業の影響を生態学的な安全の限界の範囲内に抑えられる。